

中村俊定文庫
文庫 18
511



安永四年

不

初

回



俳諧猿利口

東武 古人

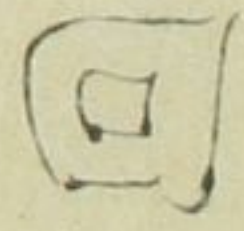
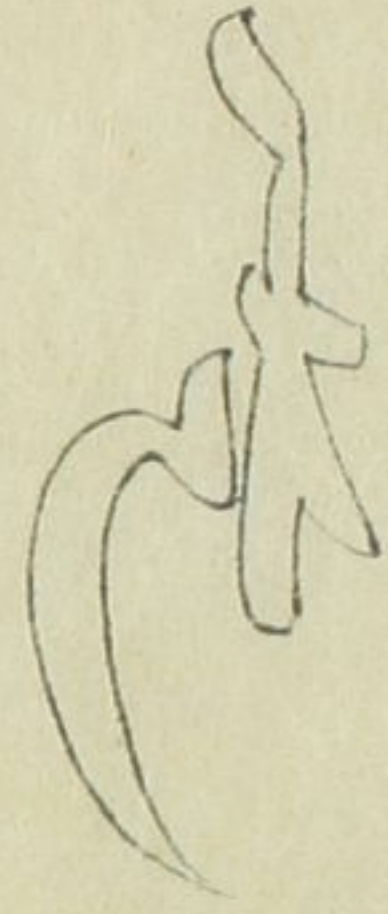
竹護窗草連選



をほかに中よあゝ玉の
春我む久て

隠居家々やと色木ふき
老木の
春柳や二筋三筋と
くくひ葉の舞ふ魚引柳也
柳居子

①



滑乃針ありけり新の松
いれさるや片枝を奈前子柄あり

日光山ふ

ふ

ほいけりや流子梵字の似此捻
色くのせ小瘦くき縹紫毛
ゆきころは智熊紗あり杜如
旭旭りし人なりふこの人あり
孫て初巻の巻見そよわハ子規

病中の歌

ほろとらんお母の嘆吐おとけ

丹波歌

ほろ時つとくす雲あり大江山
今枝の井小あり夕涼
とれをみとんへて詠を志す

昔光光吉如末日のお再世

あはるるやとる同音小に哉明

河崎ぬ顔 ちりあふや岸の鴈

琴鳴の画賛

誰人の梨さうしり野分
さましく乃中此果や丸中
志智志をさやちきま

柳若子正徳の比 様子と云信を水又妻阿といふ
也ききき 是者一人之 武後著仰の石原といへる
公よりお文の地子 示を修 予を備はち
陸方して 依此を学ひぬ 不白多をれ 予世の人乃
よく志学 不白は 百分の一 哉 亦は 記す

御子の様えふ比やまの島 春来

批灯は初ら 縁り妻やあ
ほとふは 通根のまろく 教は

~~~~~

起し々 鈴指 校の 布下 ぶげん  
大い 月日の 支念 盤 籠 居 てる

春未あけり 風流 集の 逢を 言名の ほう 海  
人乃 志る 心 替 川

瑞尻のきへてきとゆりしん成 馬光子

このくち乃かゝ地あるもの子等

鶴嶋のお時口すれを厄松

う光子始末丸と云柳花子日巻是もお文の  
地は右住予小をいふをすめ種水い此を人

日くくく 和墨画此中の生感ち 大鼻子

善くくく 汲くくく 日のいかなし

大鼻子お泊泊門人素丸長糸の俳友志

点と星成好之伝他おま書れて云勢いとくなく  
仙事廣きりと直加列は同字の大鼻といふ  
人おお人ちり

松ちんくく 帯の船日と生まわり 不角

三日月お梅おりく 夢むつこ

一子成他へつりり

きんくくく やりて孫やまき虫

丸くくく 葉お袋く 藤おふこのち

本々しは九輪の塔乃九輪が

昔季のやをのり多哉の

ふ角ハ貞直も何事か京岡もあつて一風り  
してそ比せよ化鳥風と云されどもこれらの句は  
さよ何うはやいりき刀一燈の作をみやう徳世の  
四白めふ雪のそ残りてほしくきまといひのささ  
たる句は予りふ吟の師老水翁お角々社中  
をりよめて吹卷あましつともし風儀ぬりく  
おんのこまきまはす

今乃せふ下子な侍くや猫の恋 鳥醉

ひと川家の灯を中にしよほ風が

うさすや生れちく小舟の色 大梅

雪を枯系中絶葉んたり 曲菴

涼しきや舞いふる佛あり

あふまき浦まき

月と日の夜りさされそめ老が 蓮谷

炉をくさや猫のめとんり世の 青里

ほしく此柩の志さく垣根が

紀逸

若此おれをさしける紅梅が

風をぬ人の日に後や綱代を

糸の又端こへた糸柱のな

宗瑞

赤糸おく這子亭より 文衣

宗瑞おとさ墨墨者の一人に

十三歌 豆蔲の味の月歌の形

清泉

接津園の伯母と意匠をぬ 梅籠の

李範

さびしけや分胡蝶の神の小葉垣

田社

そのこゝれ此満るそいや十三歌

巴人

一万葉やのえしたるも牛けら

黒露

赤きより后は梅乃白きり南

古寺や苔ふ梅のけほし

そをみねや月も日もし白岡

新るのあめさ甲一ちよと煙草の梅

夕立のくくく老くくく一糸の



たしなむそくしをきれと備はれ

悪家た甲斐西玉と名店をむせひ石州の  
の茶事をいしきりいなるひのに苗所の  
店成証ひ伝及隣茶の友より

新はり隠さや餅子のおとけま 安士

奇楠焼そ志やうきくせんまはる

風夕よりも家業を解 豆の香 祇徳

く抄しよよいり物 一ツあ代の表 乾什

海里ちうく 志よちう 大廿日

表をとの日小く 乾くもちり 雲柱

瓜乃蔓は 茄子の生りし 以則

五味に別と云 傳送之多病して 東武所しり  
むれと詩又 豪談たの 勇胆を我支考 龍文を  
志をむきく たりと 知文豪 東武より ぼりお  
長せき 亦や 多叶す

茶此 糸やおよをぬ人 亦おとあろ 心祇

明をるを たすし 海の ありさか

(2)

(3)

月をやつと水を人の大あ日

葉うく水糸麻のおや瓜を汁

いと中およ約あきくおの雀成

山ち乃味増はきき管既中成

鬼成うい能身梅も春うち

持あまきあく詠の松や籠貴著

米榴の今うまさともぬ師を引

以先のふ別りまぬくも水成

④

蒼狐

隆平

鯛名

祇取

羽子板の落あんとへくおぬ

善くく日乃何あくく日志月

くくひきや日成引延はあ此内

あやとの柄おくく明乃春

あおの杭をえきぬく以干成

赤鳥乃怪売をゆるあ象あ成

あさるるあやまあしあ知寸

羊素

日室

訃子

李窗

あ標の柄をいふ候の在園也

⑤

よ一極 春又 卯日や小日月  
 左と出 哉 抱子 左と守 ちと守 哉  
 口 出 して 了り け 方 赤 ち 連 へ 度  
 爛 へ ち と け ち ち ち ち ち ち ち ち  
 柳 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
 辛 崎 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
 平 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

諫子

卜 淵

趙 波

瑤 琳

左一板の画 了り ち ぬ 徳 指 ち  
 串 柳 乃 耳 ち ち ち ち ち ち ち ち  
 屋 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
 鐘 樓 あり ち ち ち ち ち ち ち ち  
 道 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
 形 山 小 鷹 ち ち ち ち ち ち ち ち  
 空 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
 春 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

此方の麓崎り錦の浦予に友替り利て  
お州大磯子浦苗小田原を足送里る土く  
ま多葉の書く水く水くも三十とせひあ

とく帯かう志て指糸何う志

六月の地籠もはく蓮う南

妹よあふて

新法ゆも能似てきく似の菱

せり子又同つあく水川夫乃川

生強る能のちくさめや善象  
象の月や起しけい底る九九根  
船民も船民よこへて旧刀を

板子此の書をすおんさる句作として高耳心

此世の夜の月入る何とて

大振といふ味方あるを

情おせさおる局もあ一水車

けとや柏小籠の葉の須





日光山まゝ

支一文字才一怒る日枝の志

まつや浪のそらぬ志れく

漢、海浪不難磨の及又東武子くくぬ  
お時考まおえんしゆるそは初言乃吟  
人くおえたる中一ぬ

下野馬山

辞計

是さくあぬをたうせはちうりんを  
蟻れぬのゆるまや海の水れ上

四博月

春ぬいて出ふまはれ未算紅  
演名氏

人先へ倒て恥をすくきうな  
堀越氏

此土若くして仙をぬえ三十字またし  
おんまぬ歌留の時乃吟し

うさ山

桃をとり裾へ挿く歌おとらぬ  
澤山

春此枝の波たうりまあるたうり  
無名氏

一文ふ過の扱者へ仙を望するまはる人  
の句ちとれこき物さうそな穢月まほめて  
男子を能げえ日しとらひとて此句を仕く  
まことにおそあしき風程の信かとうま忘れ  
たへしおせる蕨花の史流り歌れ

十三

そは切は波乃音あはれ思ひす講 参り因寄 文靜

板起ひの文上ぬけて月見水 兼人

春も風柳乃う歌柳多 雲裡

や裡お葉名の人こ世静う心才して  
相丈といふそはお尻付

若水や老をいも水く筒井管 乙由

のんこ智ふも淋いおおえけ

春や今歌おあちめ春よ嘆

肌さむねをくめや星のおれより

一とせ三引より葉字の時此史の妻兼を  
存志くゆ流此世句我短冊はをくく不談  
中人来て右市のやうい輝乃句不室の  
す一呼をれいとみは上上の草我とま  
可いをくを照付水も

蓮れ葉よ葉ふくく瘦てけり

世史の句を皆花の葉よあり不捨せーたん  
乃句たりも我志く一也



京 山人

よ 野おて 蛇のたまね 袂う南 写 鈴

月家 神風 吹や 神た 変

写 鈴 ひと せ 松 島 竹 して 下 野 の 山  
尔 立 是 斗 斗 丸 丸 に 山 若 者 時 予 丸 城 内 二  
あ け ー 中 持 と 別 神 付 是 ね 丸 丸 三 千 七 七  
先 与 一

写 持 院 若 板 の 写

十四

五

元日や雪の戸越乃麦をけ 台波  
行口尔の系とてくを田畑あへ  
とくおきよ志の君子を記す  
子に親く好風向て瓜粉  
有<sup>相</sup>相尔ぬや好尔を相路の月  
有仙や美乃清園であら  
炭をえく下戸ゆまぬん外  
情乃むく文画や配里

ゆきや波羅の糸は光の中

春泥金台收々来武吉 歌の口人よて  
きししと来阿らちち又催ふもよを来嵐者  
の風骨を志しぬる実の人物人平来阿ま乃  
因馬お里より交りはき伝友ちり一哉惜  
外ちの臘月八日と物故とさきしるなり

ゆき玉や折子ぬ流小中の唐 太祇  
駕お里より折よのちせもも是も  
出代の雪みおとんあらし

園歌

飛引さるあしといをんをひらく

あま道志といふ歌をさかして

了るりあふくつみ地 道乃あ

此歌句よとすとあひはるるともあめ

誰かやすのや 御下を

加をわくさるるさるる

鳴るる世た人の世もよ

定体たぬさるるよつて之仙

右我年 東氏より 知己之故をたぐひる  
可い実実而の 仙淡夜 なるるさるる  
仲秋 貴なるる ありたりぬ

伏尺

地々ぬ丸さるる志なる園歌 齋英

夕月とあしなるる成ぬるの歌

武野燭石

あつちるる 蝶とちがすれさるる

東氏 在世人

又る時ハ唯まと思ふ枇杷の花 神成子

櫛乃はま葉赤き子の採歌小

赤い糸の欠の嘆き糸回今も 存業

おそろしく密柑喰ふも蚊を引

新焼のおの作とま川に胡の枝

四布五布も此うねの葉の蒲田介

其の根乃小判のそりや二日月 卯雲  
 さびしきそり萩のあつねや 春 百菴  
 名目赤山一月り十三萩  
 せりこげとあまらり大崎日  
 青梅や細いあやまのそり 煉仏  
 白狐の山又て雪和らそり月  
 さみしきおしれとみだの十五日 平砂  
 船をすこよよ上るはあり言打船

西りのそり死すそりしそり月 さる丸  
 さびしきをわしおあねぬ確り旬 三巻  
 つけ入てそりお枝おや治り物 錐口  
 とくくくし二とと買やあつ男 買明  
 海へちい平赤りそりおはえんお 花在  
 梳系々屋舗ハナとそりおめのお 赤里  
 赤あまの茶碗とそりおあひし

うまひはほのくとの一字なり 九郎

よきまのあやもむしあやの紙

芝菜

福身は砂ふろき角力なる 半仙

木子心

山崎やあやあいの片下り 田女

机りえすめの羅えん阿いさなる

湖乙

大福や去るハきのみろお徳の 宗梅

貞室の初なるやまなは鼻骨 風十

粉のきりあをすゝあやありあひ 茶子

うまひまあや升はむしあいのすしうまひまあや ワッ波

ろくあやあいのゆるあや枯ああや てるあ

松竹は立ちあつても脚をば 不六

お梨のとも地あはあまを攻甲 乃立

餅信ふりたりあはあ汁 茶子

松きぬハナリそ月のニリ日 長茶

仙河

善六

小知

一落

切きぬる能くやどりし

あきまやれやあいつこ夏の上

サ五のあつたよけておとす

何物とくらハヤききれぬ

世代やうりく言三悔の茶を

万葉

柳きく一悔珠の小漁る

夏草やさ復て残小垢離場を

丁のねとのむきよと合子入

紫はけそよのさあおるは市

知事知の供又判る小信ぶ

山松乃海ききえくわつる

接川

此の柳石もさきまらむしき

かち柳あやさの枝端と三の歌

えりやるやめしと来世は神  
えりや伊勢方の白子の初さへ  
彩くもや根戸に埋火出き友  
る乃叶く油をぬる白子  
まめ咲て咲おしなり屋の月  
梅さくや又あまをい物と  
道端のあけ垣根やまつら

連歌のよき名の 隠念のあま世を又て俳諧  
おきあしき物とあまをい物と

大炊川よ

あさひけ杖杖糸組や夕す

升後上京ヨカ道

くる歌さよと朝朝まさひのあ  
あけくふをサのまのさす牡丹  
朝顔ハモの太若をけり  
終りけりあをさるやあま  
揚屋おて大門をおく秋のま



大英のくきふをいぬ  
まへにふ録 云ふさく  
名月や 柳乃 京下 井の  
井此草のたれちり  
ふとつ 雲れ 市井の  
阿比むりや 野の

橋川沖田と号し又木樨房と号す  
左の知已く 志致 伴て 志致の 志一とせ 志二とせ  
志三の 志四とせ 柳花 柳花 柳花 柳花 柳花

休国保ふ人之初は 嵐雪の心 紫白字とちなる  
まより せさあゆむ 俗人をなと 謙事の外 他  
有るをいひのす 身おふる 今今 今今 今今  
色きさ 白何 白雲の 洒落なく 足指 如眼の  
師乃 志致を 志致と 志致と 志致と 志致と  
執心 志致と 志致と 志致と 志致と 志致と  
す 書志 志致と 志致と 志致と 志致と 志致と  
葉の 句みつ 志致と 志致と 志致と 志致と 志致と  
志致と 志致と 志致と 志致と 志致と 志致と  
志致と 志致と 志致と 志致と 志致と 志致と

京 五世人

山法師おとるき世や海教を 南山

那ういふもそむのあさういおふく

夕なれと戸をさす秋と成るり

ぬくとゆえの朝や大師 誦

た、庭の風乃むらさやむめ此系 武  
多 少

すやーとゆくを根きぬんおね魚

夕月や下戸の世はなれ引き

世は又<sup>し</sup>起り<sup>し</sup>京師は<sup>し</sup>何事ありてあり記

山陰の葉のたさきぬあけりぬ

三南

西風のたけをりほそんる

たけやふ代連うまの二たしら

几重

好キ人乃<sup>し</sup>望めり<sup>し</sup>さ<sup>し</sup>む免の糸

摺神尔ニ<sup>し</sup>と<sup>し</sup>や<sup>し</sup>道<sup>し</sup>のあ<sup>し</sup>り<sup>し</sup>張

の<sup>し</sup>く<sup>し</sup>苗<sup>し</sup>一<sup>し</sup>さ<sup>し</sup>ち<sup>し</sup>や<sup>し</sup>秋<sup>し</sup>の<sup>し</sup>雨

遠くあそふ子は<sup>し</sup>芳<sup>し</sup>ひ<sup>し</sup>ある<sup>し</sup>は<sup>し</sup>衣<sup>し</sup>が

を<sup>し</sup>とり<sup>し</sup>の<sup>し</sup>を<sup>し</sup>本<sup>し</sup>借<sup>し</sup>ふ<sup>し</sup>り<sup>し</sup>種<sup>し</sup>が

抱<sup>し</sup>て<sup>し</sup>木<sup>し</sup>ハ<sup>し</sup>い<sup>し</sup>り<sup>し</sup>枯<sup>し</sup>し<sup>し</sup>る<sup>し</sup>種<sup>し</sup>此<sup>し</sup>を<sup>し</sup>

竹雲

を<sup>し</sup>と<sup>し</sup>え<sup>し</sup>や<sup>し</sup>獵<sup>し</sup>師<sup>し</sup>、<sup>し</sup>妻<sup>し</sup>あ<sup>し</sup>り<sup>し</sup>河<sup>し</sup>の<sup>し</sup>水<sup>し</sup>が

刈<sup>し</sup>取<sup>し</sup>や<sup>し</sup>竹<sup>し</sup>の<sup>し</sup>あ<sup>し</sup>と<sup>し</sup>あ<sup>し</sup>り<sup>し</sup>り

鳥西

夕<sup>し</sup>影<sup>し</sup>や<sup>し</sup>野<sup>し</sup>を<sup>し</sup>和<sup>し</sup>や<sup>し</sup>種<sup>し</sup>狐

川<sup>し</sup>上<sup>し</sup>の<sup>し</sup>中<sup>し</sup>に<sup>し</sup>枯<sup>し</sup>木<sup>し</sup>や<sup>し</sup>板<sup>し</sup>川

冬<sup>し</sup>枯<sup>し</sup>や<sup>し</sup>姪<sup>し</sup>舞<sup>し</sup>の<sup>し</sup>月<sup>し</sup>と<sup>し</sup>摺<sup>し</sup>て<sup>し</sup>あ

白笑

庵寺くあ音をくろあふたり  
 柳もも帰ふあまを川一れ  
 ささけしやまのよしう紙も  
 志らるや松ふの燈のいん  
 人あまのまふ遊の梅まき  
 碇あそ歌あそいれよりや後の柳  
 ほろふあまの懐のて麻賣  
 西もしてやまふ物を芝の声  
 来雨  
 曲室  
 牛行  
 南祖  
 土暖  
 屋雲  
 俵雨

春してとま川あつる海嵐  
 ささけと説書外て移さん  
 稲妻やあまの針とて強まき  
 船り日の標はの呼吸ハ口  
 家熟乃るなるり成まそ月人あ  
 舟の月あしこしうささしり  
 社出るんと角あまのけの錫牛  
 明やまを物あまの二たふ  
 孤桐  
 季遊  
 二欠  
 赤ぬ  
 田福

秋草ぬきめりさきまの地よみ

昔陰は来取の人や兼代志

つきらの供きも果てな飲

りくの深まらうや柳乃を

よふさへるよの蔓やうの枯

菜の毛の風を飲ひてり世

新込し徳屋ふれあや中あ

小古忌のあうらうや巳午市

子曳

新文

欠雅

吟五

菴住

み月ふる越くすのあつさ

志さうり又て生るき公園果

志あふ想うしお花の白

あうるまの相の本買よ路の

ぬ人の顔うまを干うら

物いたて雛うはく物桃乃

牛二走 静まつみ行 柳庭

雪の子ようあをうれふゆひ

買友

式然

妮吏

菴住

菴住

末川

古

雪

うきは木を井を継ぐ川 石池

孤舟と鮎の男北氷の那

田螺ふらふふとくも 必化

まきしるの五月のや海乃上

好美 山を這行 言の歌

名目や野ハ波と立寄と俣 芦友

深柳の木木揺る 結そり

井ハ井く寄又寄の川続

ふき又のまをさしり 狐も 杜足

おむとハ見へぬ海流の糸張 丹川

まのぬの魂きり みるま 洞、

梅さしき梅のこの越月えぬ 春武

く久花あやふねおひ岩のぬれ方

名も花あやたしきあまふ花介 麦畑

相乃葉し浪河の葉まて花水 桑竹

あつたの梅さしきあまふ花介 年秋

わくそ月乃出白く時を  
深き山麓に中をくく  
梅を親り引世に鳴子外  
志たしくあきり隣の火煙  
見えたるをえたる野路や啼蛙

本之  
紅朴  
雅因  
菴村

世をりあはれ山岳ありとく  
出て見ればあきくうやみ  
山城と大和の里や川子鳥  
月乃出てあはれ白き枯野  
まのあきくあきくあきく  
しめく此白ひつらや枯野  
春はやほれくくくく乃  
萩の宮へつたりのあきく

春獅  
渡牛  
美尔  
丑二  
沼野  
文皮  
舞岡  
笈谷





系ひ今をせしむしと思ひ川流の如く  
 あつめとふまのよみ川を流して猿  
 とやうと意する小法を志せんをゆ  
 けられたるまはまきまき世の  
 事とせしむるはくまの事とせしむるはくまの事  
 末の四日たふさふさ名ももふ  
 一の乃昔の縁うねるをりる此  
 くの二三子とせしむるはくまの事

皮の志を流るんとあふまき  
 世乃幼の事とせしむるはくまの事  
 昔は採りて世乃あふまき  
 川三周の事とせしむるはくまの事

安永乙未年



安永乙未年

